

## 学生団体「自彊会」による京都帝国大学の校風改革運動

富岡 勝†

### はじめに

学生を「大人君子」として遇するという木下広次総長の方針のもと、創立以来の京都帝国大学で設けられていた学生寄宿舎の生活は、学生の自由に任されていた。入舎出願順でどんな学生でも入舎が許可された上、寄宿舎内の生活について細かな規則は設けられなかったのである。

しかし、京大の分科大学や学科の設置が次第に進行して学生数が1000人をこえていったことなどにもない、寄宿舎生の風紀は悪化し、日露戦争後の1905年秋には次のような状態になっていたとされる。

或ハ夜半コスメチツクニ頭ヲメカシ単騎遠征スルモノアリ其向フ処ハ言フニ忍ビズ或ハ寢室ニ淫売婦ノコトヲ語リテ傍ラ人ナキガ若ク或ハ自修室ニ俗謡ヲ歌フテ恬トシテ恥ヅルナク月末ニハ料理店ノ仲居門前踵ヲ接シ賄料ノ不納ハ尋常ノ茶飯事視シ如此ニシテ寄宿舎ニ何等統一アルナク接壁猶呉越ノ思ヒヲナシ従ツテ生命ナク一個ノ棟割長屋ノ感アリ臭穢ノ氣堂ニ充チ百鬼横行ト言フモ決シテ誣語ニアラザルナリ」<sup>(1)</sup>

このような寄宿舎の状況を改善しようと、数名の寄宿舎生が改革運動を開始した。はじめて開催された舎生総会において、次のような内容からなる改革

案を提出したのである。

- (1) 舎生の自由を束縛しない範囲で一定の規約を作ること
- (2) 委員数名を設置すること
- (3) 舎内の秩序を乱すものには相当の制裁を加えること<sup>(2)</sup>

しかしこの改革案は、「大学の寄宿舎は斯かる幼稚なる規則を設く可き処にあらず」「自由を尊重すべし」<sup>(3)</sup>などの反対多数で否決された。

こうした中、大学は同年12月15日の「都合に依り来る十二月二十九日より当分寄宿舎を閉鎖す」<sup>(4)</sup>という達示を出して寄宿舎を閉鎖したが、翌年1月の告示によって寄宿舎を「規律アリ制裁アル一切磋商団体」として位置づけ直したうえで、2月5日に再開している。

このような京大寄宿舎の一時閉鎖と再開の過程については、従来の研究でもよく知られている<sup>(5)</sup>。しかし、この寄宿舎改革グループについて詳細にとりあげた研究はまだ見られない。

本学学生寄宿舎吉田寮より大学文書館に寄託されている寄宿舎関係の史料<sup>(6)</sup>を調査する機会を筆者は得たが、この寄宿舎改革グループが、1905年12月10日に設立されて学内外で活発な活動を展開した「自彊会」という学生団体の中心的メンバーであることが調査を通じて判明した。そしてこの自彊

† 近畿大学教職教育部専任講師

会が再開後の寄宿舎において果たした役割や、各分科大学における親睦団体の設立などへ及ぼした影響などについても次第にわかってきたのである。

この時期の寄宿舎内の具体的活動については拙論「京都帝国大学における寄宿舎『自治』の成立とその変化」<sup>(7)</sup>で扱ったことがあるが、自彊会に焦点を据えながらこの時期の京大の寄宿舎や学生団体などをとらえかえすことにより、総長など大学側の方針だけでなく、学生からの活動がこの時期の京大の学風に大きな影響を与えていった様子が明らかになるのではないかと思われる。そこで本稿において、自彊会の設立経緯、構成メンバー、活動内容などを分析し、当時の京都帝国大学においてどのような役割を果たしたのかを検討していくことにしたい。

以下、自彊会の発足(第1章)とその活動(第2章)について述べた後、その活動が早くも数年のうちに衰退してしまう経緯(第3章)を見た上で、自彊会の果たした役割(第4章)について述べていくことにする。

## 第1章 自彊会の発足

### 第1節 発足の経緯

1905年に寄宿舎改革案を提出した舎生の中心メンバーのひとり、第一高等学校(以下、高等学校名は「一高」などのように略称を用いる)出身の法科学生北田正平(1904年入学)であった。北田の京大卒業の際に友人によって書かれた文のなかで、北田が外山・平野・勝山の3名とともに寄宿舎改革グループを結成したことが次のように記されている。

思ヘラク此ノ如キハ大学ガ寄宿舎ニ期待スル所以ニアラザルナリト自ラ無為ニ託スルヲ以テ士ノ情ニアラズトスル君ハ外山、平野、勝山、ノ三氏ト協力挺身寄宿舎改進ノ旗ヲ翻セリ<sup>(8)</sup>

外山は理工科学生の外山岑作(七高を1904年に卒業、入学年不明。東京帝国大学総長をつとめた外

山正一の長男)、平野は法科学生平野正朝(一高出身、一高時代は野球部の二塁手として活躍)、勝山は勝山勝司(法科学生、1904年入学、一高出身)のことである。外山をのぞく3名がいずれも一高出身の法科学生であった。これについてはあとで考察する。

この4名による改革案が寄宿舎臨時総会で否決されたあと、北田らは寄宿舎内外から同志を集めて新しい学生団体を設立しようと動きはじめた。1905年12月4日夜に開かれたこの学生団体の「発起人熟談会」では、北田・外山・平野・勝山をはじめとした発起人総数は36名を数え、次のような規約が確定したのである。

#### 一、会名 自彊会

易曰天行健君子以自彊不息

#### 一、綱領

内ハ以テ相扶持シ相切磋シ胥率キテ与ニ正義ノ人トナリ終生渝ハルコトナカラシムヲ期シ外進ンデハ学ノ内外ニ於ケル気風ノ革新ヲ期ス

#### 一、入会

会員各自責任ヲ以テ大学内ニ於ケル同志ノ士ヲ紹介スルコト<sup>(9)</sup>

これによって、会の名称は『易経』中の言葉である「自彊」(みづから励まして努力する)から決めたこと、団結して正義の人となって「学内外の気風革新」を目指すことを会の目標としたこと、入会は会員の推薦制としたことがわかる。

同8日には、「同志の士何ぞ来りて友愛の霊味を掬し、相扶持し相切磋し共に俱に自彊の道程に上らざる」<sup>(10)</sup>と述べる檄文を發した。そして、同10日に法科大学大講堂において発会式を挙げたのである。42名の出席者を集めて発会している。この発会式には学生だけでなく、木下広次(総長)、石川一(学生監)、荒木寅三郎(京都医科大学教授)、新渡戸稲造(法科大学教授)、岡村司(法科大学教授)、仁保亀松(法科大学教授)、伊藤隼三(京都医科大学

教授)、藤浪鑑(京都医科大学教授)などの総長や学生監をふくむ教職員も参加した。学生有志による団体でありながら、大学公認の様相で発足したのである。

結成時から自彊会の会員であった飯田精太郎(理工科学生、1904年入学、五高出身)は、入会当時を以下のように振り返っている。

京都大学ハ学生ヲ俟ツニ大人君子ヲ以テシ且ツ寄宿舎等ノ設備モアリテ學術研究ノミナラズ品性ノ陶冶ニモ重キヲ置クト聞キ其學風モ英国大学ノ美風ヲ加味セル理想的紳士ノ養成所ナラント、是レ余ガ去三十七年高等学校ヲ卒ヘテ大学ニ入ラントスルニ当リ京都大学ニ対シテ有セシ推想ナリキ、而シテ此推想ガ余ヲシテ京都大学ニ入ラシメタル主ナル原因ノ一ナリシナリ〔略〕京都大学ハ所謂京都市式卷絵ノ重箱ナリシナリ中身ハ外装ニ対シテ恥ヅベキモノナリキ京都大学ノ自由放任主義ハ秩序ナキ自由ヲ養ヒ、現代ノ風潮タル個人主義ハ此秩序ナキ自由ノ中ニ培養セラレテ所謂本能主義ニ變ジ濁流ハ濤々トシテ学内ニ横流セリ、而シテ學風ノ中心タルベキ寄宿舎ハ濁流ノ源泉ナリト稱セラレヌ、当時大学生ヲ大人君子視セルハ親切ナル一ツノ大学アリシノミ、「花街ニ於テ角帽ガ一番モテル」ト此一語大学ヲ道破セリト稱セラレシヲ知ラバ当時如何ニ大学生ナルモノガ世人ノ眼ニ映ジ居タリシカハ知ルニ難カラザルベシ<sup>(11)</sup>

飯田が京大に入学したのは、1903年に刊行された斬馬劍禅『東西兩京の大学』<sup>(12)</sup>によって京大の教育方針が絶賛されていた頃である。ここに記されたような入学前の京大への期待感と入学後の危機感が、飯田だけのものではなく、他の会員たちにも共有され、それらが「学内外の気風革新」への原動力となっていたと推測することができる。

このように自彊会は、寄宿舎だけでなく、「学内外の気風革新」を目指して結成された団体であり、

有志団体でありながら、公的な性格もあわせもつ組織であったということができよう。

次に、会員構成を分析することによって自彊会の性格についてさらに考えていきたい。

## 第2節 一高出身者中心の会員構成

発会式での会員は42名であったが、意見の違いなどから創設直後の退会者も出たうえ、1905年2月や3月ごろに入会したメンバーもいたことが会費納入状況からわかる。そのため、創立当初のメンバーとして分析する対象を、1906年5月現在の会員名簿に載っている57名とした。

この57名の出身高校、分科大学、寄宿舎在舎期間<sup>(13)</sup>、卒業年月日<sup>(14)</sup>、寄宿舎専務総代歴などを記載したのが〔表1〕である。また、後述するような学内団体の役員歴についても記載した。

自彊会は学生の任意団体であり、会員名簿も公表されていなかったようである。したがって本稿では、原則として、会員氏名のかわりにイニシャル(氏・名の順)を記した。ただし、寄宿舎専務総代と学内団体委員などについては、刊行物である『京都帝国大学寄宿舎誌』と『以文会誌』に氏名が公表されているので、これらの委員についてはイニシャルではなく、氏名を表記した。

また、京大全体の出身校別入学者数の傾向を知るために、1904年入学学生の出身・校別人員表を『京都帝国大学一覽』(従明治三十七年至明治三十八年)から〔表2〕として作成した。ただし、京都キャンパス内で組織された自彊会員の出身校構成との比較をおこなうため、福岡医科大学の分は除外してある。

この〔表1〕と〔表2〕から、発足期の自彊会員には、一高出身者が非常に多いという特徴があったことがわかるだろう。

〔表1〕では、一高出身者が1906年5月現在の自彊会員57名中21名を数え、約37%を占めている。一方、〔表2〕で見ると、京大全学(福岡医科

[表1] 自彊会出身校別内訳 (1906年5月現在) (富岡作成)

| 氏名<br>・イニシャル | 在舎期間                          | 分科 | 卒業年月     | 出身校 | 本籍  | 寄宿舎専務総代                 | 学内団体委員   | 備考   |
|--------------|-------------------------------|----|----------|-----|-----|-------------------------|----------|--|
| I. B         |                               | 法  | 1906年7月  | 一高  | 新潟  |                         |          |  |
| 北田 正平        | 1906年2月～1907年1月               | 法  | 1906年12月 | 一高  | 東京  | 1906年2月当選<br>1906年10月当選 |          | 自彊会設立の中心メンバー   |
| 勝山 勝司        | 1906年2月～1907年1月               | 法  | 1906年    | 一高  | 長野  |                         |          | 自彊会設立の中心メンバー   |
| 岡 虎太郎        | 1906年2月～1906年7月               | 法  | 1906年    | 一高  | 岡山  | 1906年2月当選               |          |  |
| K. T         | 1906年2月～1906年7月               | 法  | 1906年    | 一高  | 東京  |                         |          |  |
| 平野 正朝        | 1906年2月～1907年7月               | 法  | 1907年7月  | 一高  | 茨城  | 1906年10月当選<br>1907年2月当選 |          | 自彊会設立の中心メンバー   |
| 三澤 寛一        | 1906年2月～1907年7月               | 法  | 1907年    | 一高  | 長野  | 1907年2月当選               |          |  |
| T. Y         | 1906年10月～1907年6月              | 法  | 1910年    | 一高  | 山梨  |                         |          |  |
| Y. T         |                               | 法  |          | 一高  |     |                         |          |  |
| O. E         |                               | 法  |          | 一高  | 静岡  |                         |          |  |
| S. T         | 1906年2月～1909年7月               | 法  |          | 一高  | 東京  |                         |          |  |
| F. H         | 1906年2月～1908年1月               | 医  | 1907年11月 | 一高  | 大阪  |                         |          |  |
| S. M         | 1906年2月～1907年12月              | 医  | 1907年11月 | 一高  | 東京  |                         |          |  |
| S. M         |                               | 医  | 1908年2月  | 一高  | 岩手  |                         |          |  |
| H. G         |                               | 理工 | 1907年11月 | 一高  | 茨城  |                         |          |  |
| I. R         | 1906年2月～1907年                 | 理工 | 1907年    | 一高  | 岡山  |                         |          |  |
| M. S         |                               | 理工 | 1907年    | 一高  | 三重  |                         |          |  |
| Y. M         |                               | 理工 | 1908年    | 一高  | 埼玉  |                         |          |  |
| 大島 亮治        | 1906年2月～1909年11月              | 理工 | 1909年    | 一高  | 東京  | 1908年10月当選              |          |  |
| 佐藤 千里        | 1906年2月～3月<br>1910年2月～1910年7月 | 理工 | 1910年7月  | 一高  | 茨城  | 1907年10月当選<br>1908年2月当選 | 同帰会設立を提案 |  |
| T. M         | 1906年2月～1908年9月               | 理工 | 1908年7月  | 一高  | 兵庫  |                         |          |  |
| 板垣 政参        | 1906年2月～1908年2月               | 医  | 1907年    | 二高  | 岩手  |                         |          | 芝蘭会創立委員 (1906年)  |
| M. E         |                               | 理工 |          | 二高  |     |                         |          |  |
| S. S         |                               | 法  | 1906年7月  | 三高  | 愛知  |                         |          |  |
| O. A         |                               | 法  | 1907年12月 | 三高  | 京都  |                         |          |  |
| K. R         | 1906年2月～1906年7月               | 理工 | 1907年    | 三高  | 神奈川 |                         |          |  |
| Y. Y         |                               | 理工 |          | 三高  |     |                         |          |  |
| K. S         |                               | 法  | 1906年7月  | 四高  | 岡山  |                         |          |  |
| 千秋 寛         | 1906年2月～                      | 法  | 1907年7月  | 四高  | 福井  | 1906年10月当選              |          |  |
| I. U         | 1906年2月～1907年7月               | 法  | 1907年7月  | 四高  | 石川  |                         |          |  |
| T. T         |                               | 医  |          | 四高  |     |                         |          |  |
| 藤井正太郎        | 1906年2月～1912年2月               | 医  | 1909年11月 | 四高  | 東京  | 1908年2月当選               |          | 芝蘭会創立委員 (1906年)  |
| 温井 亮吉        | 1906年2月～1909年7月               | 理工 | 1911年    | 四高  | 石川  | 1910年2月当選               |          |  |
| I. K         | 1906年2月～1908年9月               | 理工 | 1908年    | 四高  | 三重  |                         |          |  |
| 塩見 勉         |                               | 理工 | 1908年7月  | 五高  | 長崎  |                         |          | 同帰会幹事 (1907年)  |
| Y. Y         |                               | 理工 |          | 五高  | 宮崎  |                         |          |  |
| 河野 亀治        |                               | 法  | 1907年7月  | 五高  | 岡山  |                         |          | 『青年修学指針』編集の中心  |
| I. I         |                               | 法  |          | 五高  |     |                         |          |  |
| S. S         |                               | 法  |          | 五高  | 鹿児島 |                         |          |  |
| H. M         |                               | 法  | 1907年7月  | 五高  | 愛媛  |                         |          |  |
| H. A         |                               | 法  |          | 五高  |     |                         |          |  |
| 花田大五郎        | 1906年2月～1906年7月               | 法  | 1908年    | 五高  | 福岡  |                         |          | のちに京都帝国大学<br>学生監 (1924年7月<br>～1925年扱、1925年<br>12月～1928年兼任) |
| I. U         |                               | 法  | 1906年7月  | 五高  |     |                         |          |  |
| T. I         |                               | 法  | 1907年7月  | 五高  | 佐賀  |                         |          |  |
| K. K         | 1906年2月～1907年9月               | 法  | 1907年    | 五高  | 愛知  |                         |          |  |

| 氏名<br>・イニシヤル | 在舎期間             | 分科 | 卒業年月     | 出身校 | 本 籍 | 寄宿舍専務総代                                    | 学内団体委員 | 備考           |
|--------------|------------------|----|----------|-----|-----|--|--------|--------------|
| T. Y         |                  | 医  |          | 五高  |     |  |        |              |
| I. S         | 1906年2月～1907年7月  | 理工 | 1907年7月  | 五高  | 山口  |  |        |              |
| T. K         | 1906年2月～1908年2月  | 理工 | 1908年2月  | 五高  | 石川  |  |        |              |
| F. K         | 1906年2月～1907年3月  | 理工 | 1909年3月  | 五高  | 福岡  |  |        |              |
| U. S         | 1906年4月～1908年6月  | 法  | 1908年7月  | 六高  | 新潟  |  |        |              |
| T. A         |                  | 法  | 1908年7月  | 六高  |     |  |        |              |
| 伍賀喜太郎        | 1906年2月～1909年11月 | 法  | 1909年    | 六高  |     | 1907年10月当選                                 |        |              |
| J. E         |                  | 法  |          | 六高  |     |  |        |              |
| N. R         |                  | 理工 |          | 六高  |     |  |        |              |
| Y. S         |                  | 理工 |          | 六高  |     |  |        |              |
| 外山 岑作        | 1906年2月～1909年11月 | 理工 | 途中退学     | 七高  | 東京  | 舎生総代(1906年入舎式)、専務総代(1906年2月当選)(1907年10月当選) |        | 自彊会設立の中心メンバー |
| N. W         | 1906年3月～1907年10月 | 理工 | 1907年10月 | 七高  | 福岡  |  |        |              |

大学を除く)における出身校別分布では、一高出身者は394名中わずかに25名であり、約6パーセントでしかない。したがって、この時期の自彊会員には一高出身者がきわだって多かったことになる。

しかも、すでに紹介したように、自彊会前身の寄宿舍改革グループの4名中3名が一高出身であった。

一高出身者が多かったことは注目に値する。1890年には一高校長をつとめていた木下広次によって寄宿舍に自治制が採用され、生徒たちは「制裁」条項を含む寮規約をみずからつくったという経緯があったからである。北田ら4名が規約・委員・制裁などを導入した寄宿舍改革案をつくる上で、「制裁」を含む一高の寄宿舍自治制が大きな影響を与えたことは十分推測できる<sup>(15)</sup>。

次に、「学内外の気風革新」にむけた自彊会の活動内容を見てみよう。

## 第2章 自彊会の活動

### 第1節 会員同士の親睦行事

先に紹介した規約によって「内ハ以テ相扶持シ相切磋シ胥率キテ与ニ正義ノ人トナリ終生渝ハルコトナカラシムコトヲ期」すことが述べられているように、自彊会の活動では、まず会員の団結を目的とし

た遠足・旅行・送別会・談話会などの親睦的活動が重視された。

1905年12月10日の発会式、12月15日の寄宿舍閉鎖達示といった重要な時期に最初におこなわれた活動も、12月17日の岩倉山での兎狩りであった。40名の会員と5名の来賓教員が参加し、朝3時半に出町橋に集合するという熱の入れようであった。翌1906年におこなわれた親睦的活動を列挙すると次のようになる。

- (1月30日)岩倉山で再度兎狩り。40余名参加。
- (2月18日)山科宇治伏見方面へ風雪をおかしの遠足。29名参加。
- (3月24日)石山へ一泊旅行。
- (5月5日)卒業予定者のための送別会。50名参加。
- (9月17日)休暇中の土産話による談話会。
- (9月23日)鷲峰山への一泊遠足会。31名参加。
- (10月28日)大原への遠足。
- (11月24日)比叡山への一泊旅行。30余名参加。<sup>(16)</sup>

創設から1年間に遠足・旅行・談話会・送別会などが熱心におこなれたことがわかる。これらは一見、単なる遊びのようでもある。しかし、遠足・旅行・談話会・送別会などの親睦的活動は、会員間に「学内外の気風革新」のための同志的結合をつくる重要な

[表2] 1904年入学学生出身校別人員表（福岡医科大学を除く）

|        | 一高 | 二高 | 三高 | 四高 | 五高 | 六高 | 七高 | 山口高 | 東京帝国<br>大<br>学 | その他 | 計   |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|-----|----------------|-----|-----|
| 法科大学   | 12 | 11 | 30 | 14 | 34 | 18 | 6  | 21  | 29             | 6   | 181 |
| 京都医科大学 | 7  | 9  | 18 | 9  | 9  | 13 | 8  | 7   | 0              | 0   | 80  |
| 理工科大学  | 6  | 11 | 26 | 19 | 14 | 17 | 12 | 20  | 2              | 6   | 133 |
| 計      | 25 | 31 | 74 | 42 | 57 | 48 | 26 | 48  | 31             | 12  | 394 |

『京都帝国大学一覽』（従明治三十七年至明治三十八年）より作成

活動であったようである。たとえば、1905年12月17日の兎狩り後に開催された夜の会食では、「席上寄宿舎閉鎖に対する会の態度を議し、暫く静観して後日の発展を見て適宜の行動に出でんとす」<sup>(17)</sup>といった具合に重要な意思統一もおこなわれていたのである。

また、余暇を不道徳的な遊興に費やすのではなく、遠足、茶話会などにあててお互いの交流を深めることは、一高寄宿舎において模範的な学園生活とされていた。こうした意味でも自彊会は一高の影響が深かったといえるだろう。

## 第2節 寄宿舎改革

自彊会は北田ら寄宿舎改革グループから生まれたこともあり、自彊会員たちは寄宿舎の改革にもっとも力を注いだ。

すでに見たように寄宿舎は、1905年12月に閉鎖されたが、1906年1月、木下広次総長によって次のような告示が出され、2月から再開することとなった。

大学寄宿舎カ学生ノ研学修養上重要ナル一機関タルヘキ所以ノモノハ在舎学生カ特ニ規律アリ制裁アル一ノ切礎団体ヲ組織スルニ由リテ存ス而シテ此目的ヲ達セント欲セハ寄宿舎開始ノ時ニ於テ先ツ其基礎ヲ確立セサルヘカラス因テ此際学生監ヲシテ入舎希望学生ニ就キ特ニ選択セシメ以テ創勦ノ事ニ当ラシメントス入舎希望ノ者ハ本文ノ趣旨ヲ体シ入舎願書ヲ差出スベシ<sup>(18)</sup>

つまり、寄宿舎を「規律あり制裁ある切礎団体」をつくる場として位置づけ、その趣旨に見合った学生を入舎希望者のなかから学生監が選考することとしたのである。

以下、再開後の寄宿舎と自彊会の動きを簡単にみてみよう。

2月8日までに58名の学生が学生監の許可を受けて入舎し、そのうち半数の29名が自彊会員であった。

2月10日の入舎式では、自彊会創設メンバーのひとりであった外山岑作が舎生総代として、次のような決議文を朗読した。

吾人は茲に総長告示の旨を体し且つ我舎が本学に対する本来の責務を思ひ一致協力之が実行を期す<sup>(19)</sup>

2月10日は寄宿舎記念日とされ、この決議文が「舎生の決心」として朗読されるならわしとなった。

2月11日には、寄宿舎運営の中心的役員として専務総代が選出された。選ばれたのは、いずれも自彊会員である岡虎太郎（3月12日より岡に代わって平野正朝）、外山岑作、北田正平であった。

また、毎月一回ずつ定期総代会と茶話会を開くことなども決議された。総代は、1室4名程度の各部屋の代表者である。定例の総代会によって寄宿舎の日常的な問題が決定された。茶話会は、自彊会内の茶話会と同様、メンバーの結束をはかるとともに、意見交換などを通じておたがいの切礎琢磨をはかる場としても重視された。

3月3日には舎生総会が開催され、「共同生活ヲ

害スルモノアルトキハ総代会ヲシテ之ニ相当ノ制裁ヲ加」えることや、「入舎ノ許可ハ総代会ノ諮詢ヲ經テ学生監之ヲ定ム」<sup>(20)</sup>などの内容の寄宿舍申合を決定している。

このように、再開後の寄宿舍では自彊会員を中心にスタートしている。1906年1月の総長告示で述べられている「規律アリ制裁アル切磋団体」とは、まさに1905年秋に北田ら4名らが寄宿舍改革案として主張していたことでもあったといえる。

実はこの共通点は偶然ではなかった。そのあたりの事情を、木下広次は総長退任後に次のように述べている。

日を経るに従ひ追々乱雑に流れ多数の舎生中には学生にあるまじき行為をする者すら生じて止む得ず其当時の総長即ち自分は遺憾ながら閉舎した。然るに茲に意志鞏固思想健全なる学生の一団ありて寄宿舍の一生面を開かん事を協議し再び開舎せられん事を申出た其熱心努力は中々堅実に見受けられ其施設方法宜しきを得ば充分効果を挙げ得べきを信じて自分も遂に賛成して再び開舎することにした<sup>(21)</sup>

つまり大学は、寄宿舍の基礎づくりをまかせられる団体として自彊会が登場したことによって、寄宿舍再開に踏み切ったのである。

このように再開した寄宿舍は単なる建物ではなく、自彊会主導による大学公認の「切磋団体」としてスタートした。1908年10月までにのべ18名選出された専務総代は1名を除き、すべて自彊会員であった。以後の新人舎生選考の実権は総代会を代表する専務総代にあったので、寄宿舍は、大学から自彊会に運営を委託されたような状態となったのである。

自彊会会員内で遠足・旅行・会食などが重視されたのと同様、寄宿舍においても毎月の茶話会、季節ごとの松茸狩り、兎狩りなどがおこなわれた。舎生の結束をはかることが主な目的であったと考えられる。また、茶話会は、娯楽的要素だけでなく、数名

ずつがさまざまな話題について演説をおこなう場でもあった。

1906年10月からは専務総代をつとめた自彊会員外山岑作の発議によって、舎生同士の意見交換のため舎内回覧雑誌が2ヶ月に1度程度の頻度でつくられるようになった。たとえば第1号『吉田之秋』では、自彊会員北田正平は、次のような記事のなかで、各部屋の代表者である総代の選出方法について次のように注意を促している。

近頃聞く所によればある室では総代を抽引で極めたそうだが又ある室では投票に簡単に定めたそうだが選挙するのは当然であるけれども極めて簡単に形式的にやられては果して熱誠が存するやと持ち前の疑心を起こさずには居られない殊に抽引と来ては如何にも滑稽ではあるまいか<sup>(22)</sup>

さらに1908年4月には自彊会員の舎生5名によって、従来の茶話会だけでなく、「舎に関することのみならず、大学、学生全般に関する意見、抱負、希望等を赤裸々に吐露し切磋琢磨に資」するような会を設けることが提案され、以後、思想交換会として年2回開催されるようになった<sup>(23)</sup>。

1910年には、寄宿舍内の切磋活動を広く学内外に知らせることを目的に『京都帝国大学寄宿舍誌』が創刊されている。『京都帝国大学寄宿舍誌』は、舎生(寄宿舍OB)との通信とともに、寄宿舍の理念や活動を広く学内外に伝えることが目的とされていた。この創刊号には、自彊会員外山が舎友として「吾寄宿舍の生立」という寄宿舍の理念に関する論説を寄せ、当時専務総代をつとめていた自彊会員中谷茂は「寄宿舍沿革略」を執筆している。

学生監石川一は自彊会の発足準備においても会合場所を提供したり兎狩りに同行するなど積極的に援助しており、後に職員としては唯一の自彊会員となっているが、この『京都帝国大学寄宿舍誌』創刊に際して次のような文を寄せている。

切磋を目的とする寄宿舍が舎誌を発行する

は、固より切磋的行動の一に外ならず、故に余の舎誌に望む所は舎誌が切磋の一機関たるべき実を挙ぐるに在り、議論の多き固より妨げず、侃々の論諤々の議、筆端の花火を紙上に散らすが如き、最も望ましきことに属す、然れども確乎たる主張を根底に有せず、心にもなき空言放言を敢てして自ら以て快とし、他人を欺き兼ねて又自己を欺くか如き、最も避けざるべからず、感興に富み趣味の饒きは、誠に結構の事なりとす、然れども浮華の筆を弄し、輕薄の態を学び三文文学の響に倣ふか如きは、極めて嫌悪に値すべし〔略〕舎誌にして滔々たる世間無用の雑誌に伍するが如きは甚だ取らざる所たり<sup>(24)</sup>

寄宿舍の切磋活動への期待と、切磋に資するよ  
うな真面目な雑誌づくりの注文が込められていると  
いえよう。

以上のように、大学側から自彊会へのなかば委託  
の形で、再開後の寄宿舍は学内の気風革新にむけ  
た模範的「切磋団体」としてスタートしたのである。

### 第3節 学内外での講演会

自彊会の活動は、数十名の寄宿舍内だけではなく、  
学内外の講演会という形でもおこなわれた。

1906年3月31日、京都市内の第五高等小学校に  
おいて自彊会主催の演説会が開催された。

三月十一日、午後一時より富小路第五高等  
小学校に於て演説会及講演会を開く、会員北  
田正平、三沢寛一、猪股勲の説演、青柳博士、  
田島博士の講演あり、聴衆三百余名<sup>(25)</sup>

また同年4月11日には、以下のように、大阪市  
立高等商業学校より、大学生に講演をしてほしいと  
の依頼が大学に寄せられている。

四月十一日、大阪市立高等商業学校始業式  
の事あり、校長福井彦次郎氏同教諭伊藤真雄  
氏等、予て学生気風革新に意あり、「同じく学  
びつゝあるものゝ地位よりして講話せられなば

却々生徒に対して感動もあらん」との主旨よ  
り、中山学生監補助に京都帝国大学々生二人  
を推薦せん事を依頼し来り。中山氏之を本会  
に諮る、吾会は其主張を拡充し、其理想を鼓  
吹するに於て、大に捉ふべきの機会となし、会  
員岡虎太郎、猪股勲を推して之に応ず<sup>(26)</sup>

このように、学生監補助中山は、自彊会に相談  
し、その結果、自彊会員の岡虎太郎と猪熊勲が講  
演に赴いている。この事例からも、自彊会に対する  
大学側の期待がうかがえるだろう。

4月26日には、法科大講堂において自彊会主催  
の演説会がおこなわれている。詳細は不明だが、3  
月末からの1ヶ月間に自彊会員による演説・講演が  
3回も持たれたことになる。

さらに10月13日には、自彊会主催の第2回公開  
演説会が京都市会議事堂で開催されている。岡村・  
藤浪両教授の講演もおこなわれたこともあって、聴  
衆600名の大規模な演説会であった。弁士と題目は  
次の通りであった。

自彊会員三沢寛一(開会の辞)

自彊会員板垣政参(国士)

自彊会員北田正平(唯一途あるのみ)

自彊会員猪股勲(岐に泣く)

岡村博士(余が諸生に与へたる教訓)

藤浪博士(健康主義と青年健康の危機)<sup>(27)</sup>

この題目からみて、国家主義や修養についての講  
演会であったと想像できるだろう。

1906年には、このような講演会とともにさらに多  
くを対象とした出版事業も行われている。

### 第4節 『学界之先蹤青年修学指針』の出版

4月26日の演説会終了後、自彊会員中の30名が  
有志ですすめていた出版計画が夜12時まで及んだ  
議論の末、会の事業となることが決定された。そし  
て同年6月、京都帝国大学自彊会同人編『学界之  
先蹤青年修学指針』として博文館より出版された。

これは、自彊会員たちが自分たちの経験をもと



に、中学校時代、高等学校時代、大学時代の修学についての心得を進学希望者に対して述べたものである。

とくに、大学時代についての章の結論として、「大学教育と品性」について、次のように述べている。

乃ち知る、吾人は靈性を修養し、品性を錬磨すること最も必要にして、而かも大学教育は之れに与らざることを。然れども特に注意せよ、其の与らざるは之を除外し、閑却すると同じからざることを、大学教育豈此重大要件を排斥するものならんや、只現今の制度之を完うするの機会を欠き、方法存せざるの故に、之を挙げて学生各自の自修に任せたるのみ、学生の責任又重しと謂はざるべけんや<sup>(28)</sup>。

大学教育には品性の錬磨が欠かせないにもかかわらず、現在の大学制度では品性錬磨に関する機会がない。したがって学生自身の責任でおこなっていかねばならないと訴えているのである。まさに自彊会による「学内外の気風革新」の主張が込められた出版物であったといえるだろう。

### 第5節 分科大学親睦団体発足への影響

ここまで見たような1906年を中心とした自彊会の活発な活動は、各分科大学ごとの団体にも影響を与えている。

1906年4月、「運動会」主催による水上大会のあと開催された理工科大学選手の慰労会の席上、自彊会員の佐藤千里が理工科大学の親睦組織を設ける計画を発表した。この計画は、同年11月には教官会議の賛同を得て、理工科大学同帰会が成立している。佐藤の提案を原案としてつくられた会則において、会の目的は、「第二条 本会の目的は会員の親睦と一致とを計るにあり」とされ、活動内容は、「理工科大学出身者と在学々生との連絡をはかること、年一回会員名簿を作ること、旅行、遠足、親睦会、茶話会、運動競技等をなすこと」と定め

られた<sup>(29)</sup>。

医科大学でも1906年春に教職員・卒業生・学生で構成する親睦組織の設立準備を開始し、6月に会則を編成し木下総長の命名によって芝蘭会を発足させている。この際に任命された創立委員は、荒木学長、鈴木教授、中西教授、および7名の学生であったが、自彊会員の板垣政参と藤井正太郎が含まれている<sup>(30)</sup>。

このように理工科大学では「親睦と一致」をはかるため旅行、遠足、茶話会などをおこなう同帰会が自彊会員の提案によって設けられ、医科大学でも自彊会員を含む創立委員によって親睦組織の芝蘭会が発足したのである。これらの会の発足にむけた自彊会員の活動は、「学内外の気風革新」を目指した活動の一環であったといえるだろう。

### 第6節 木下総長からの評価

1907年4月1日の京都帝国大学創立十周年記念祝式における式辞のなかで、木下総長は次のように述べている。

本大学カ学生及卒業生ニ期待スル所ハ其ノ能ク学芸ヲ講究シ精神ヲ修養シテ有用ノ人材タルト同時ニ完全ナル士君子タルニ在リ本大学ハ常ニ此ヲ以テ学生教養ノ方針ト為ス而シテ学生精神ノ修養徳操ノ錬磨ノ如キハ主シテ之ヲ学生間ノ切磋ニ待ツ蓋シ学生ノ団体ハ其ノ本来ノ性質上一ノ切磋団体タラサルベカラス然カモ其切磋カ最モ切実ニ行ハルヘキモノハ日夕起居ヲ共ニシ臂ヲ連ネテ学ヲ講スルノ寄宿舎ヲ措キテ他ニ之ヲ求ムベカラス寄宿舎カ学内ニ於ケル重要ノ一機関タル所以モ亦実ニ茲ニ在リ故ニ本学ニ於テハ寄宿舎学生ガノ規律アリ制裁アル模範的切磋団体ヲ組織シ進ミテ学風ヲ発揚シ修養上ノ中堅部ヲ以テ自ラ任センコトヲ期待シ着々トシテ之ヲ誘導スルヲ怠ラス而シテ在舎学生ガ善ク此意ヲ体シ戮力其實行ノ責ニ当ルヲ見ルハ本総長ノ最モ喜ブトコロナリ

其外近来学生間ニ学芸若クハ修養ヲ目的トスル種々ノ団体ヲ生シ相互ニ切磋磨礪シテ大ニ氣風ヲ振作シ大学生タルノ面目ヲ發揚セントスルノ傾向アルハ本大学ノ最モ喜フ所ナリ<sup>(31)</sup>

寄宿舎が学生修養のための「規律アリ制裁アル模範的切磋団体」となったこと、さらに舎生たちが期待どおり「学風ヲ發揚シ修養上ノ中堅部」を目指した努力をおこなっていることを「本総長ノ最モ喜ブトコロナリ」と高く評価しているのである。さらに「学生間ニ学芸若クハ修養ヲ目的トスル種々ノ団体」が生まれ、「相互ニ切磋磨礪シテ大ニ氣風ヲ振作シ大学生タルノ面目ヲ發揚セントスルノ傾向」が出てきていることを「本大学ノ最モ喜フ所ナリ」としている。寄宿舎改革や各分科大学の親睦団体設立とともに自彊会による「学内外の氣風革新」の活動であったが、木下総長はこれを高く評価したのである。

このように「学内外の氣風革新」をめざして1905年12月に生まれた自彊会は、寄宿舎改革・演説会・出版・分科大学親睦団体設立運動などの活発な活動を1906年ごろを中心におこない、総長から「最モ喜ブトコロナリ」という高い評価を受けるに至ったのである。

ところが、自彊会は発足から数年のうちに寄宿舎および学内での影響力が低下していく。その経緯について明らかにしていきたい。

### 第3章 活動の衰退

#### 第1節 新規入会者の変化

[表3]は、1906年5月以降1911年頃までの自彊会への入会者39名を一覧にしたものである。

まず注目される特徴は、新規入会者が減少傾向にあったことだろう。すでに第1章[表1]で紹介したように創設当初は約半年で57名が入会したのに対し、1906年5月以降1911年頃までの約5年間で、39名の入会者であった。1年間あたりわずか8名足らずの計算となる。

会創設当初の会員は2～3年後にはほとんどが卒業してしまったので、このような入会者の減少は自彊会の活動能力に深刻な影響を与えたであろう。

たとえば1909年には、会員数は86名であったが、多くが卒業してしまった会員であるため、「学に残れるもの僅に十数名」<sup>(32)</sup>という状態であった。学内で活発な活動を展開することは難しくなっていたのである。

これは、すぐれた「人物」として会員が見込んだ学生を会員に推薦するという方法で会員募集をしていたことも関係しているだろう。また、同志的結合体としての自彊会に共鳴する学生が減少していったことも示しているだろう。

[表3]の二つ目の特徴として、一高出身者の割合の減少が挙げられるだろう。

[表3]の39名中、一高出身者は10名であり、約26%の割合となっている。第1章[表1]でみたように、創設当初(1906年5月まで)は会員数57名に対して一高出身者は21名で37%の割合であった。これと比べ、[表3]ではあきらかに一高出身者の割合が減少していることがわかる。

ただし、京大入学者全体のなかでの一高出身者割合が大きく減少したために上のような変化が生じたということも考えられる。そこで、京大入学者(福岡医科大学を除く)中の一高出身者の割合を確認してみたが、一高出身者の割合が大幅に減少した形跡はみられない。

第1章の[表2]で紹介したように1904年の入学者では一高出身者は約6%であった。これとの比較のため、1907年の入学生(福岡医科大学を除く)のデータを[表4]にまとめた。1907年の入学者における一高出身者は約13%である。京大入学者中の一高出身者の割合はむしろ増加していることがわかる。

したがって、自彊会入会者のなかで一高出身者の割合が減っていったという現象は、会自身の変化と関係が深いといえるだろう。

[表3] 1906年5月以降の自彊会入会者出身校別一覧表（富岡作成）

| 氏名<br>・イニシャル | 在舎期間              | 分科 | 卒業年月     | 出身校 | 本 籍 | 寄宿舍専務総代                | 学内団体委員                        | 備考            |
|--------------|-------------------|----|----------|-----|-----|------------------------|-------------------------------|---------------|
| M. Y         | 1906年4月～1907年7月   | 法  |          | 一高  | 京都  |                        |                               |               |
| M. K         | 1908年3月～1908年9月   | 法  | 1911年7月  | 一高  | 兵庫  |                        |                               |               |
| 中屋 重治        | 1910年10月～1912年7月  | 法  | 1914年7月  | 一高  | 福岡  | 1911年12月当選             | 法学会委員                         |               |
| 中谷 茂         | 1907年10月～1912年7月  | 医  | 1911年    | 一高  | 長野  | 1909年9月当選              |                               |               |
| A. K         | 1907年10月～1909年3月  | 医  | 1911年11月 | 一高  | 広島  |                        |                               |               |
| K. R         | 1907年10月～1912年7月  | 医  | 1911年    | 一高  | 岐阜  |                        |                               |               |
| H. N         | 1908年2月～1912年7月   | 医  | 1911年11月 | 一高  | 岐阜  |                        |                               |               |
| 落合 太郎        | 1910年7月～1912年7月   | 文  | 1913年    | 一高  | 東京  | 1911年9月当選              | 運動会委員（弓術）（1911年度）             | のちの文学部教授、三高校長 |
| S. S         | 1911年3月～1912年7月   | 文  | 1913年7月  | 一高  | 福岡  |                        |                               |               |
| 須藤徳三郎        | 1908年11月～1912年7月  | 理工 | 1912年    | 一高  | 山形  |                        | 以文会準備のための同婦会委員                |               |
| 名越那珂次郎       | 1907年10月～1911年2月  | 文  | 1910年7月  | 二高  | 茨城  |                        | 以文会雑誌部委員（1909年度）              |               |
| M. H         | 1910年10月～1912年7月  | 理工 | 1912年    | 二高  | 宮城  |                        |                               |               |
| 今橋 又吉        | 1907年2月～1909年2月   | 理工 | 1909年    | 二高  | 愛媛  |                        | 同婦会幹事（1907年）                  |               |
| H. M         | 1906年10月～1909年11月 | 理工 | 1909年3月  | 二高  | 岩手  |                        |                               |               |
| F. B         | 1907年10月～1908年？月  | 法  | 1910年7月  | 三高  | 岡山  |                        |                               |               |
| 小越 知軌        | 1911年10月～1912年7月  | 法  | 1914年    | 三高  | 東京  |                        | 運動会委員（柔道）（1912年度）             |               |
| 辻 亮吉         | 1908年11月～1912年7月  | 医  | 1912年    | 三高  | 和歌山 | 1911年12月当選             |                               |               |
| 千秋 二郎        | 1910年2月～1912年2月   | 医  | 1912年11月 | 三高  | 石川  | 1910年1月当選<br>1911年2月当選 |                               |               |
| 佐武安太郎        | 1906年4月～1910年11月  | 医  | 1909年    | 三高  | 和歌山 | 1908年10月当選             |                               |               |
| 根木 精一        | 1910年3月～1912年2月   | 理工 | 1912年7月  | 三高  | 新潟  | 1911年12月当選             | 運動会委員（柔道）（1911年度）             |               |
| K. M         | 1907年10月～1908年5月  |    |          | 三高  | 大阪  |                        |                               |               |
| Y. Y         |                   | 法  | 1912年7月  | 四高  | 石川  |                        |                               |               |
| 土谷 巖         | 1906年10月～1907年3月  | 法  | 1909年7月  | 五高  | 広島  |                        | 1909年春の学生大茶話会で準備委員代表          |               |
| S. K         |                   | 法  | 1911年7月  | 五高  | 熊本  |                        |                               |               |
| A. G         | 1911年2月～1912年2月   | 文  | 1911年7月  | 五高  | 熊本  |                        |                               |               |
| S. S         | 1906年2月～1908年6月   | 法  | 1908年    | 六高  | 岡山  |                        |                               |               |
| I. A         | 1911年3月～1912年7月   | 医  | 1914年2月  | 六高  | 香川  |                        |                               |               |
| 岩男 督         | 1909年4月～1912年2月   | 医  | 1912年    | 六高  | 大分  | 1911年9月当選              |                               |               |
| A. A         | 1911年2月～1912年7月   | 理工 | 1914年7月  | 七高  | 鹿児島 |                        |                               |               |
| 何 盛三         | 1906年4月～1908年6月   | 法  | 1908年    | その他 | 東京  |                        |                               |               |
| 長谷川慶三郎       | 1907年10月～1909年3月  | 文  | 1911年7月  | その他 | 千葉  |                        | 以文会雑誌部委員（1909年度）              |               |
| 内田 寛一        | 1910年10月～1912年7月  | 文  | 1913年    | その他 | 佐賀  |                        | 以文会雑誌部委員（1911年度）、学友会委員（1911年） |               |
| 石川 一         |                   |    |          | 職員  |     |                        | 学生監をやめたあと入会                   |               |
| K. N         |                   |    |          | 不明  |     |                        |                               |               |
| 笹岡 恭平        | 1906年2月～1911年10月  | 医  | 1909年    | 不明  | 新潟  | 1909年2月当選              |                               |               |
| F. M         |                   | 理工 | 1907年7月  | 不明  |     |                        |                               |               |
| 佐藤 憲治        | 1906年10月～1909年11月 | 理工 | 1909年7月  | 不明  | 福島  |                        | 同婦会幹事（1907年）                  |               |
| Y. S         |                   |    |          | 不明  |     |                        |                               |               |
| K. K         |                   |    |          | 不明  |     |                        |                               |               |

[表4] 1907年入学学生出身校別人員表（福岡医科大学を除く）  
『京都帝国大学一覽』（従明治四十年至明治四十一年）より作成

|        | 一高 | 二高 | 三高 | 四高 | 五高 | 六高 | 七高 | その他 | 計   |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 法科大学   | 5  | 1  | 7  | 3  | 5  | 4  | 1  | 9   | 35  |
| 京都医科大学 | 20 | 1  | 17 | 11 | 13 | 10 | 8  | 0   | 80  |
| 文科大学   | 2  | 1  | 15 | 3  | 5  | 1  | 4  | 9   | 40  |
| 理工科大学  | 2  | 4  | 20 | 2  | 10 | 13 | 8  | 12  | 71  |
| 計      | 29 | 7  | 59 | 19 | 33 | 28 | 21 | 30  | 226 |

ここでヒントになるのは、[表3]において自彊会員中の三高出身者が7名を数え約18%であり、一高出身者につぐ割合となっていたことである。第1章の[表1]では、57名の会員中、三高出身者はわずか4名で約7%に過ぎなかった。つまり、三高出身者の割合は2倍以上に増えていたのである。

しかも、寄宿舎のまとめ役である専務総代に就任した会員数をみても、[表1]では三高出身者の専務総代はゼロであったのに対し、[表3]ではのべ5名を数えていることがわかる。[表3]に限定すれば、三高出身会員の専務総代のべ5名という数は、一高出身会員ののべ4名を超えている。

このような一高出身者の影響力低下は、創設当初に比べ、一高式の寄宿舎自治活動という共通体験によって会員の同志的結束を強めることが難しくなることを意味しているのではないだろうか。この頃の三高の校風は「自由」を標榜したものであった。両者の本格的比較は今後の課題であると考えられるが、一高出身者と三高出身者の寄宿舎観には隔たりが存在していたと考えられるからである。

以上のような会員構成の変化によって、活動力の低下と、同志的結束の困難という二つの課題に自彊会は直面することになったと考えられる。

次に、1907年からの自彊会の活動が実際にどのような状態であったかをみていきたい。

## 第2節 活動の停滞

自彊会による遠足・旅行・送別会・談話会などの親睦行事は、1907年から1910年ごろまでは、会創設

直後ほどではないにしても、定期的におこなわれていたようである。

毎月1回のペースで会員内の茶話会が開かれ、卒業する会員の送別会も毎年おこなわれた。また11月には会の誕生を記念して登山や一泊旅行がおこなわれていた。また卒業した会員が京都に寄るたびに会員が集まって会合を持ったようである<sup>(33)</sup>。

しかし、卒業した会員が増えるにしたがい、「多くは外に在りて遠くはなれ、互に顔を知らず、声も聞かぬ同人亦少なからず」<sup>(34)</sup>という状況が生まれたようである。これに対して、回覧用郵便物に各自が近況を追記して転送していく「通信」や、数回の会報発行といった方法が試みられたが、「学内外の気風革新」にむけた同志的結合を維持していくのは困難になっていったようである。

親睦行事以外はどうであったろうか。寄宿舎での自彊会員の活動についてはあとで触れるとして、講演活動や出版活動の状況についてみてみよう。

1906年には学内外で自彊会主催や自彊会員が講師に招かれる形で何度も講演会が開催されたが、1907年からはほとんどおこなわれなくなった<sup>(35)</sup>。また1906年におこなわれた出版活動も、以後見られなかった。

ただし、学内の親睦団体に対する自彊会員による働きかけには注目すべき動きが見られた。まず、理工科大学の同婦会の委員に[表3]に掲げた会員のうち3名(1907年に2名、1909年に1名)が就任していることである。第2章でみたように同婦会の設立には自彊会員佐藤千里が深く関わっていた。

1907年以後も自彊会員が同帰会に関与していたことがわかる。

さらに注目すべきは、1909年に設立された全学的学生団体である以文会の設立に自彊会員であった土谷巖（法科学学生、五高出身）が準備委員代表として主導的な役割を果たしていたことである。

以文会は、全学生・卒業生の「相互の親睦を計り其智識を通融せしむる」<sup>(36)</sup>ことを目的に、大茶話会や講演会を開催するとともに、学生生活の概況を報告する雑誌の発行などをおこなう団体である。

全学生参加の団体としては、京大創立翌年の1898年に設立された「会員の身体を壮健にし其心神を修養する」<sup>(37)</sup>ことを目的とした「運動会」があったが、文化的な活動は含まれていなかった。自彊会員の活躍によって全学的な文化的活動の組織が設立されることは、「学内外の気風革新」を目指す自彊会にとって大きな意味を持ったであろう。こうした意味で、1907年からの自彊会は、学内親睦団体に対する働きかけという面では大きな成果を収めていたといえよう。

しかし、このときの自彊会にとって、以文会の設立は微妙な意味も有していたようである。以文会設立準備で主導的役割を果たした土谷は、自彊会のあり方に疑問を持ち、改革案を提出していたからである。

1909年2月27日に、今後の自彊会のあり方についての茶話会が開かれ、毎月の定例茶話会よりも多くの会員が集まって議論した。このときの記録によれば、土谷は次のような改革案を提起している。

本会の現時の儘なれば無益なり宜しく開放的のものとなし来者不拒去者不迫的に会員の品行等些末の等は問ふ所なくして総てを寛く容れて会に同化せしめば以て学内の風紀上大に貢献する所ある可きなり<sup>(38)</sup>

会員の推薦によって入会者を決めるのではなく、入退会を学生各自に任せる開放的な会に改める。入会の時点では各学生の品行を事細かに問わず、会の

雰囲気次第に同化させることで、結果として学内の風紀向上がはかれる、と土谷は主張したのである。

別の会員も土谷の主張に賛同して、「会員が責任を以て新会員を紹介するてふ会則の削除を主張して会を開放的にせんことを切諭す」<sup>(39)</sup>と述べている。

しかし、この会のために自彊会創立メンバーのひとりである外山は、次のように土谷の改革案に反論した。

先づ第一に土谷君の説に反対す而して厳格に従来の会旨を守らんと説き会員相互の親み水魚の如くなる可き事終生変らざる事を得べき事苟も本会の一員が紹介したる人物は初より相信するに足るべき事を説き保証人制度の無意味ならざる事を主張す<sup>(40)</sup>

他の古参会員などが外山の意見に同意し、結局、土谷の改革案は承認されなかった。

自彊会改革案を否定された土谷が以文会の設立にむけて活発に活動していったのは、この後であると考えられる。

土谷の関心は、多くの学生を巻き込んだ「開放的な会」を設けようとすることにあった。土谷にとって、1909年ごろの自彊会は、会員同士の会合や寄宿舎内の活動ばかりに閉じ籠もってしまっていると感じられたのかもしれない。

一方、土谷の改革案に反対した外山ら古くからの会員は、自彊会にはあくまでも強固な同志的結合が必要であり、そうした結束をもとにして「学内外の気風革新」に力を発揮できると考えたのであろう。

1906年ごろは、同志的結束と学内外への積極的活動が両立できたのであろう。しかし、新規入会者の減少によって活動力の低下した自彊会にとって、同志的結束と学内外への活動を同時に充実させることはできなかったようである。

自彊会内部が、同志的結束を後回しにしてもよいからできるだけ多くの学生を入会させて活動力の

増強を目指す土谷らと、同志的結束の維持を優先する外山らとに分裂はじめていたと見るができるであろう。

同志的結束を優先する路線においては、自彊会内の結束を寄宿舎においても実現していくことが当面の活動目標となったと考えられる。しかし寄宿舎内においても自彊会の活動は順調ではなかったようである。

### 第3節 寄宿舎内での影響力低下

第2章で見たように、1906年に再開した寄宿舎は、事実上、大学から自彊会にその運営が委嘱された状態であった。寄宿舎運営の中心である専務総代の役職は、自彊会員が独占し、寄宿舎内の指導的位置を占め続けた。

また、新たに入舎を希望する学生は、自彊会員が多数を占める総代会の面接を受けなければならなかった。自彊会員たちが認めるような入舎決意を述べなければ合格できなかったのである。このように自彊会の影響力は寄宿舎においては絶大であった。

しかし、1909年ごろから変化が見られる。この年の2月と9月に選出されたのべ6名の専務総代のうち、自彊会員はわずか2名だけであった。さらに1910年9月選出の専務総代は3名とも自彊会員以外の舎生であった。これは、自彊会の影響力低下をはっきりと示すものであったといえるだろう。

こうした自彊会の影響力低下の背景には、舎生たちの寄宿舎に対する見方の変化があったと考えられる。

1906年ごろは、集団活動を重視する一高式の自治活動に正面から異を唱える舎生はほとんど見うけられない。しかし1909年には、寄宿舎では、集団活動よりも個人を重視するような舎生の主張が明確な形であられたのである。非自彊会員の舎生大山壽は、『京都帝国大学寄宿舎誌』に発表した「切磋団体問答」と題する文のなかで、従来型の舎生(甲生)と個人尊重を優先しようとする舎生(乙生)とを

次のように対比させている。

甲生、近来舎生の会合は一般に振はない、毎月の茶話会にも催促しても定刻に出る者は少く、兎狩などへは来る者は極めて少数、特に重要視すべき舎生総会にも欠席者が漸く多い、舎生の共同一致の精神が薄らいだのぢやなからうか。

〔略〕

甲生、〔略〕近来舎生が漸く個人主義に傾いて舎の発達の為めに心を砕くことが薄らいで来たと思ふ。

乙生、そうかも知れない。然し僕は舎生は個人主義に傾いた為めに舎が振はなくなつたとは思はない、〔略〕個人を重し之を中心とする時に初めて団体に活気を生ずると思ふ、個人主義は寧ろ奨励すべきもの、否な奨励する必要があると思ふ、吾が舎にして今個人主義の意義を明らかにしその上に基礎を立てなければ永久の発達は望み難いと思ふ

〔略〕

甲生、個人を発達せしむるには如何にする。

乙生、個人を重んずるにある。

甲生、然し個人を重んずるとすれば、共同一致の行動を要する時に之に参加しない者が多くなる虞があるぢやないか。

乙生、それは無益の心配だ、各個人が自ら進んで其行動に参加しなければ、如何に多くの人が集まるも精神のない行動で役に立たない、寧ろ参加するものは少数でも精神ある方が遙かに宜しい<sup>(41)</sup>。

つまり大山の主張は、少数であっても個人の自発的意思から生まれた行動が重要であり、舎生の自発的意志がないまま寄宿舎で共同一致の行動を求めても意味がないということであろう。これは集団的活動を重視する一高式の寄宿舎自治観とは明らかに異なる主張である。このような主張が堂々と発表されるようになったということは、舎生の寄宿舎観が変

化しつつあったということの意味しているであろう。

舎生たちの寄宿舎観の変化について、別の角度から分析することも可能かもしれない。非自彊会員の舎生である小野寺精一郎（広島高等師出身、1910年に文科を卒業後、第八高等学校教授）は、次のように述べている。

舎を開けるものは前の一高校長たりし当時の総長木下博士、最初の舎生は多く三年間寮生活をやり来りし一高出身者、常に大学の中心中堅を以て自任し通学生の大多数を自然白眼視するかの結果を生ぜし為め通学生より面白からぬ感情を抱かれし事恰も一高生が天下の秀才と呼号するものあるより他高等学校出身者が不快に思へると善く<sup>ママ</sup>平行した〔略〕舎が入舎志願者を厳密なる口頭試問を以て初めて入れたに拘らず舎の当初の精神を継承して之を發達せしむべき真の後継者は事実得られなかつた。〔略〕根本の問題として注意すべきは今日の教育は職業を授くるのである、学生の志望も云々の職にありつかんとするのである彼等の志望は以前の学生に比し明確なる形に於て然し卑近浅少に着実に現はれる。彼等の競争は物質的資料を得むとするが故に必然に排他的自利的になる。〔略〕余の見る所を以てすれば入舎志願者の大部分百中九十九迄は経費が安いと云ふ為であつた、其証拠は軍医志願者の多いのを見ても分る。即真實創立当初の舎生の志を志とする入舎志願者は時勢の変化の為もあり實際極極少数であつた<sup>(42)</sup>。

1906年に再開された寄宿舎は一高出身者中心で運営されたが、他高校出身者からの感情的反発もあったこと、自分の利害を優先する学生が増えていったため、再開当初の寄宿舎精神の真の後継者はあらわれなかったことが指摘されている。この二つの理由から再開当初の寄宿舎精神（つまり、自彊会の精神）は、以後の入舎生には支持されなかったと

小野寺は述べたのである。このような分析も舎生の寄宿舎観を考える上でひとつの手がかりとなるであろう。

以上のように自彊会は寄宿舎内での影響力も低下させていったのである。さらに、会発足当初は密接であった、大学との結びつきも変化していった。

#### 第4節 大学との関係の変化

第2章でみたように、初代総長木下は自彊会を見込んで寄宿舎再開に踏み切ったほど、自彊会を支持していた。石川一学生監のちに会員となるほど、自彊会と強く結びついていた。しかし、こうした大学側と自彊会との関係は、1907年の木下総長の病氣退官と、1910年の石川学生監の異動もあって以前ほど密接なものではなくなっていった。

大学側と自彊会との関係の変化を決定づけたのは、寄宿舎建て替え問題であった。木下総長在職時より、寄宿舎の増築構想は存在していたが、1911年ごろには、いったん取り壊して材木を流用する寄宿舎立て替え案へと変化していた。

その理由は、1911年10月6日付けの学生監関係の史料によれば次のようなものであった。

- 第一 現在寄宿舎ノ外ニ新寄宿舎ヲ一棟新築セハ明治四十七年度以降経費左ノ如シ〔略〕現在舎ヲ移転三棟ニ改築スルトセハ同年度以降経費左ノ如シ〔略〕即政府支出金ニ於テ金四千八百八十九円ヲ節約スルコトヲ得
- 第二 旧新両舎ヲ併立セシムルニ於テハ監督上不便ナルノミナナラス監督ノ不統一ヲ来ス恐アリ<sup>(43)</sup>

このように、新・旧寄宿舎併存の場合の経費増と、「監督ノ不統一」が建て替え案の理由だったようである。

大学は新しい寄宿舎に関しては、従来の寄宿舎とは異なる形態のものを試みるつもりであったようである。実際、1911年6月に公表された建て替え案においては、新寄宿舎は二つの点で従来の寄宿舎

と大きく異なっていた。

一点目は、一室一名制または一室二名制が採用されたことである。従来は一室四名制が原則であり、3～4名の舎生のなかから総代が選出されていた。新寄宿舍の方式では、生活上の小集団が形成されにくくなるという面があり、寄宿舍を集团的行動の場とするうえでは困難になる。

二点目は、入舎許可について、自治制ではなく監督制が採用された点である。従来は、寄宿舍申合によって「入舎の許可は総代会の諮詢を経て学生監之を決す」となっていた。実質的な選考は入舎希望者に面接をおこなう総代会が握っていたのである。しかし、新寄宿舍では、総代会の諮詢を廃止して出身高校の成績などをもとにして学生監が決定することとしたのである。

個室や一室二名制では寄宿舍を模範的学生集団とするには悪条件である。また入舎許可方式については、入舎希望者の寄宿舍に関する決心をたしかめる場(総代会による面接)がない。これらの意味で、新寄宿舍案は、自彊会主導でおこなわれてきた従来の寄宿舍運営を否定するものであった。この案が決定された時点で、大学側は、1906年の寄宿舍再開以来採用してきた、自彊会との連携方針を完全に変更したといえる。

## 第5節 「寄宿舍自主解散」後の自彊会

大学による寄宿舍建て替え案に対し、自彊会員は激しく反対したが、現役舎生たちによる建て替え案に対する対応が遅れたこともあり、上記の寄宿舍建て替え案は原案通り実行されることが確定した。寄宿舍生側は、大学への抗議の意味をこめて、1912年2月10日に自主解散式をおこなった。

東大路近衛沿いの位置に建て替えられた寄宿舍は、1913年に開舎したが、自彊会の影響力が完全になくなったどうかは、実は不明である。近衛の新寄宿舍においても、舎生たちは総代会を組織し、茶話会などを開催し、回覧雑誌をつくったからであ

る。

しかし、自彊会の会員で新寄宿舍に移り住んだのは1名のみであった。自彊会員が寄宿舍OBとして新寄宿舍の舎生に影響をおよぼすことはあったかもしれないが、自彊会主導の寄宿舍運営は、やはり1912年をもって終了したとみるべきであろう。

1912年以後の自彊会はどうなったであろうか。

卒業した会員が大部分となり、寄宿舍という基盤を失っても、会員間の連絡組織として存続しようとしていたようである。それにともない、卒業した会員の多く集まる東京へ移すとともに、京大の学生以外からも会員を求めるとする再編案が会員間で検討されていたようである。

しかし、この自彊会再編案に対し、設立当初からの会員であった花田大五郎は、会員宛に書簡を寄せて強く反対している。

本部移動を非となす。

この三月北田君が英国に向ふ途中此方に立寄りての話に自彊会員も東京の方が多数となりたれば本部を東京に移す方可ならんとの説出でたりとの事なれど小生は京都移動説を非とす、其の理由は(一)東京に移すべき重大なる理由を認めず(二)京都は自彊会発祥の地にして自彊会の歴史に分離すべからざる関係あれば永久に此処に本部を置くことを正当と認む(三)自彊会の後継者は京都大学より出でざる可らず本部を東京に移さば恐らくは後進の途杜絶せん或は京都に支部を置けば差支なし等の説あらんも不可なり其故は(イ)東京本部にては後進に対する世話不完全を免れず(ロ)京都を支部とせば京都の会員に其の責任を軽く感ぜしむるが故に事実上に於て継続不能となるべし。或は自彊会は京都大学生以外よりも会員を求めべし等の議あらんか、これ蓋し自彊会を稀薄にするのみならず自彊会の因て起こりし真意に反するものとして拆けざるを得ず自彊会は飽くまでも京都大学本位たらざるべからず此の理由は



言ふまでもなければ(A)世情動もすれば東京大学に比し京都大学を侮蔑するの感あり自彊会は此侮蔑より京都大学を救はんことを期す(B)啻に侮蔑より救ふのみならず進んで京都大学をして世間に重きをなさしむことを期す、是れ自彊会設立の中心面の理由なれば也<sup>(44)</sup>

このように花田は、自彊会の使命は「京都大学を救ふのみならず進んで京都大学をして世間に重きをなさしむことを期」すことにあったのだから、本部を京都に置き、学外からの入会者を求めることはせず、「飽くまでも京都大学本位たらざるべからず」と主張したのである。

自彊会再編についての結論は、いまのところ不明である。ただし、上記のような花田の熱意は、朝日新聞社記者をつとめた彼が1925年に京大学生監に就任した(前年より学生監扱いに就任)ことと何らかの形でつながっていたであろう<sup>(45)</sup>。

#### 第4章 自彊会の果たした役割

前章でみたように自彊会は創設後わずか数年で活動の停滞に陥ってしまったが、短期間のうちに、さまざま役割を果たしたともいえる。本稿のまとめとして、自彊会の果たした役割について考えてみたい。

1912年2月の「寄宿舍自主解散式」において、自彊会員である松山康民は、舎友(舎生OB)として、次のような演説原稿を寄せた(当日、松山は欠席したので自彊会員の舎生辻亮吉が代読した)。この演説原稿は、「寄宿舍の功績」として、次のように述べている。

先に我大学の創立せらるゝや爾後数年尚未だ関西の学界に覇を称し學術技芸の淵叢、青年氣風刷新の源泉たるに至らずして早く旧都の笑歌に憧れ市民の尊重に乗じて自重自敬する所なく却て猥に輕佻浮薄に陥り内は駸駸氣鋭奮進努力の意氣忽ち銷沈して悪鬼盛に横行し外大学の威信を失墜し都民をして転た敬遠

の念を起さしむるに至れり、斯く腐敗の空氣は益々学内に充満し滔々学外に横溢して進む所を知らざるの時勃然眇々の身を以て蹶起したる一団体あり是我舎創立の任に当たれる者。

爾後学内に奮闘し意氣軒昂勢の發する所時に学外に逸走して自ら任ずるに天下の青年を以てして大に学の内外の氣風刷新の衝に当りしが天運宜しくさしも墮落を極めたる学内の氣風は次第に改まり衆生区々たる心は漸く統一を來し其結果は陸上運動部の再興發展となし水上運動部の改善となり或は本学紀年日の講演となり延ては毎金曜日特別講演の緣由ともなりあり柔道劍道々場の建設となれり、又かの芝蘭會、同歸会の如き主として我舎精神の發動して成りたるものと云ふを得べく以文會創設の事之も又其地盤は吾舎の活動によりなされたりと云ふも過言にあらず。

斯くて一時失墜したる我大学の威信は漸く加はり今や東大に拮抗して敢て損色なきに至れり、斯の如くなるや固より上総長教授学生監等の鞠躬努力に埃つ所尠からずと雖も下吾等団員が或は団体として或は個人として卒先己を忘れて學風の振作に志し酷苦經營したるの功甚大なりと云ふ可し<sup>(46)</sup>。

松山が述べた「寄宿舍の功績」をまとめると次のようになるだろう。

- (1) 寄宿舍は、京大の威信を回復するため、学内外の氣風改善につとめる役割を果たし、それに成功した。
- (2) 運動会の再興發展をもたらした。
- (3) 大学の記念日における講演の開始をもたらした、毎金曜日の「特別講演」のきっかけとなった。
- (4) 柔道劍道道場の建設をもたらした
- (5) 医科大学芝蘭會や同歸会の發足をもたらした、以文會創設の地盤をつくった。

寄宿舍の活動は自彊会の主導によって行われたの

で、松山が述べた「寄宿舎の功績」は、自彊会にも通ずるところがある。この演説原稿を手がかりとして、本稿で具体的に紹介してきた自彊会の活動と照らし合わせながら検討してみたい。

まず、「功績」第一点目の自彊会主導の寄宿舎による京大の威信回復についてはどうだろうか。何をもって京大の威信回復を指すのかあいまいなのでこれについてははっきりと評価することはむずかしい。

ただし第1章で見たように、自彊会の活動は、京大への期待と危機感を原動力とした「学内外の気風革新」を目指したものであり、京大の威信回復にむけた運動であったことは指摘できる。そして、1905年ごろの京大で学生の品行が寄宿舎を中心に低下し、それが京大の教育成果に関する評価を低くしていた面があったとすれば、自彊会がおこなった寄宿舎改革は、大学に対する評価向上につながり得るものであったと考えられる。

次に二点目の「運動会」に対する役割について考えてみたい。

1905年9月に「運動会」の大会運営について、「止むを得ざる任務の外はすべて学生に於て担当すること」とする改革の動きが見られた<sup>(47)</sup>。しかし、これは自彊会成立や寄宿舎再開よりも前なので、自彊会や寄宿舎との直接の関係は不明である。

1906年4月1日の京大創立記念祝日には、「運動会」主催で、撃剣部・馬術部・弓術部・庭球部・柔道部の紅白試合がおこなわれたが、あわせて、舎生対通学生の綱引きがおこなわれた。また、会場において舎生十数名によって「京都帝国大学記念祝賀歌」が歌われている。寄宿舎生がこのときの「運動会」の催しに深く関与していたことが推測される。「運動会」の運営を寄宿舎生が支えた面があったのではないだろうか。

三点目である学内の講演活動とのつながりについては、まず、自彊会が1906年におこなった講演活動が、学内での講演行事開催の機運を高めた可能性を指摘することができるだろう。

さらに、自彊会を中心とした寄宿舎は1907年2月に、大学創立記念祝日(4月1日)の催しについて、総長に対して次のような建議をおこなっている。

- 一、祝杯は式終了後午前中に終わらしむること
- 二、祝杯の酒量及折詰の品質個数は十分に制限すべし何となれば是れ徒の費用多くして決して学生を喜ばしむる所以にあらざればなり此節費は次の事業に当つること
- 三、午後講演会を開き各科教授の講演を乞ふこと但し入場者は男子に限り入場券を發して諸学校に配布すること
- 四、午後六時より学生大茶話会を開き茶菓を喫し演説並に講談活動写真蓄音機薩摩琵琶等の余興をなすこと併し茶話会に関する周旋は寄宿舎生に於て之に当たるべきこと
- 五、各科教室全部を開放して公衆の縦覧に供すること<sup>(48)</sup>

このように寄宿舎生は、放縦に流れがちな飲酒にあてる費用や時間を減らし、浮いた費用や時間を講演会や学生大茶話会などにあてること、さらに、講演を諸学校の生徒にも来聴させることを提案したのである。この案は、第四項以外は、大学に採用されて実現した。

1907年は、自彊会が寄宿舎に強い影響力を持っていた時期であった。寄宿舎提案による創立記念祝日での講演開始は、自彊会の目指す「学内外の気風革新」が、ある程度ではあるが実体化した瞬間であったといえるだろう。

四点目の武道場は、寄宿舎付属の集会所兼剣道柔道場として、1907年2月に開設されている。室内に木下広次総長の教育方針である「自重自敬」の額が飾られ、「舎生此の中に足を入るれば自ら襟を正す」<sup>(49)</sup>というように、舎生にとって神聖な場となった。

開場式では、木下総長が所感を述べて「乾堂」

と命名している。このとき、自彊会員の外山岑作と板垣政参がそれぞれ柔道部員および剣道部員として挨拶している。式後には「直心影流形、撃剣紅白試合、柔道講道館形、同三本勝負等」の本格的な武技も披露された<sup>(50)</sup>。

柔道部と剣道部は、「運動会」内の組織として1905年に設立されているが、活動は法科の教室や三高の道場などでおこなわれていた。寄宿舎内に学内初の柔道剣道場が設けられたことに関して、自彊会がどのような関係を有していたかは不明である。しかし、自彊会員たちが切磋活動の一環として柔道や剣道を重視して学内で活発化させようとしていたのかもしれない。

五点目の医科大学と理工科大学の親睦組織である芝蘭会や同帰会の創設との関係は、第2章と第3章で見たとおりである。芝蘭会の創立委員に自彊会員が参加し、自彊会員によって同帰会設立の提案がなされていた。

全学生加入の文化団体である以文会設立も、分科大学ごとの親睦団体の設立を背景として、自彊会員が中心的な準備委員として関与しながら進められた。第3章でみたように以文会設立に直接とりくんだ自彊会メンバーは、会員間の同志的結束を最優先していた当時の自彊会においては、主流派にはならなかったようである。しかし、自彊会が以文会設立を準備する動きにかかわったことは指摘できるだろう。

以上から、自彊会は寄宿舎を模範的な学生親睦団体にもむけて改革するとともに、学内の講演活動や親睦団体の設立を促進したことがわかる。

もちろん第3章でみたように、自彊会自体は、同志的な結合を重視したあまり会創立から数年のうちに停滞に陥った。しかし、自彊会の活動を契機として、全学レベルでの茶話会、遠足、雑誌発行、運動大会などが盛んにおこなわれ、学内での講演行事とともに学生修養にむけた活動が活発におこなわれていった。こうした傾向は少なくとも京都帝国大学

時代の京大において、基本的には継続して見られるものであった。つまり自彊会は、「京大の校風に、学生修養にむけた具体的活動を重んずる傾向を加える役割」を果たしたといえるだろう。

京都帝国大学は創立時から勉学面だけでなく学生の修養面を重視する姿勢を見せていた。第1回卒業式における式辞で木下総長は、「大学々生に在ては自重自敬を旨とし以て自立独立を期せざるべからず」と学生の自発的態度を促すとともに、品行素行面において自ら注意するよう呼びかけている<sup>(51)</sup>。しかし、自彊会登場以前においては、大学は、品行面については、学生への期待を演説を通して表明していたものの、具体的な方策はほとんど持っていなかったのである。創立直後は大学の規模が小さかったこともあって「自重自敬」を演説で呼びかけるだけでも大きな問題は生じなかったが、1905年ごろまでには寄宿舎を中心に、学生の品行面改善にむけた具体策がなければ解決が難しい状況になっていたと思われる。

しかし、「自重自敬」を看板に掲げていたこともあって総長や学生監だけで有効な施策をとることが難しかったのではないだろうか。自彊会という学生団体との連携を得ることで、ようやく寄宿舎閉鎖—再開という具体策が可能となったと考えることができるのである。

このことは注目に値するだろう。京大において「総長など大学上層部の力だけでは学生の品行面に関する有効な方策を打ち出し得なかったのではないか」という仮説を立てることができるからである。これと同じような点を、宮坂広作は1890年の第一高等中学校寄宿舎における自治制導入に関しても指摘している。宮坂は、寄宿舎自治の導入は、赤沼金三郎という生徒が中心になって徳義会という生徒団体をつくって寄宿舎改革の機運を高めることによってはじめて可能であったとしているのである<sup>(52)</sup>。

この時の第一高等中学校の校長であったのが木下広次であったことは偶然ではないだろう。木下広次

の教育方針は、第一高等中学校においても京都帝国大学においても、生徒や学生の「自重自敬」をうながすという点に特徴があったが、生徒や学生の集団による支えがなくては、「自重自敬」を実現するための具体的施策が成立しなかったと見るのが可能なのではないだろうか<sup>(53)</sup>。

以上のような意味からも、自彊会が「京大の校風に、学生修養にむけた具体的活動を重んずる傾向を加える役割」を果たしたことの意義は大きいといえるだろう。

最後に、本稿で利用したような学生生活に関わる一次史料を保存・活用していくことは、これからの大学教育を考えていくうえでも重要なことであろう。大学アーカイブズが、個人のプライバシーに配慮しつつ、こうした史料の保存・活用に一層活発にとりくんでいくことを心から期待したい。

#### [註]

- (1) 「送北田君之辞」『歳暮之巻』（舎内回覧雑誌）、京都帝国大学寄宿舍、1906年12月。これをはじめとした舎内回覧雑誌は、京都大学大学文書館所蔵。
- (2) 外山岑作「吾寄宿舍の生立」『京都帝国大学寄宿舍誌』第1号、1910年、31頁。
- (3) 同書、32頁。
- (4) 中谷茂「寄宿舍沿革概略」『京都帝国大学寄宿舍誌』第1号、1910年2月、85頁。
- (5) たとえば、上田実「90年の歩みを見る 青春と反逆の吉田寮」（京都大学創立九十周年記念協力出版委員会編著『京大史記』京都大学創立九十周年記念協力出版委員会、1998年）、富岡勝「京都帝国大学における寄宿舍『自治』の成立とその変化」（『日本の教育史学』教育史学会紀要、第38集、1995年）、『京都大学百年史』総説編（1998年）など。
- (6) 寄宿舍の『寄留簿』、自彊会の名簿・会計簿・会員書簡などが残されている。京都大学寄宿舍吉田寮より京都大学大学文書館に寄託されている。

- (7) 『日本の教育史学』（教育史学会紀要、第38集、1995年）に所収。
- (8) 「送北田君之辞」『歳暮之巻』（舎内回覧雑誌）、京都帝国大学寄宿舍、1906年12月。
- (9) 『自彊会々報』（会員むけ）、1909年7月、1頁。
- (10) 「自彊会」『以文会誌』第2号、京都帝国大学以文会、1910年、127頁。
- (11) 飯田精太郎より自彊会世話人宛書簡、1908年3月30日付。
- (12) 斬馬劍禪『東西両京の大学：東京帝大と京都帝大』講談社学術文庫、1988年。
- (13) 1906年2月以降の上京区役所への書類を綴じた『寄留簿』（簿冊）によって判明したもの。この記載がない自彊会員は、寄宿舍生ではなかったとみなすことができるだろう。
- (14) 京都大学事務局庶務課編『京都大学卒業生氏名録：明治33年一昭和30年』（京都大学、1956年）や、『京都帝国大学一覽』などによって判明。空欄は、不明分および非卒業者。
- (15) しかも当時、一高では新入生は全員寄宿舍に入ることとなっていた。北田・平野・勝山はいずれも1903年一高卒であるから一高寄宿舍を体験していると推定することができる。

また七高出身の外山は、「南北寮事件当時の一高の健児に対して恥ずる処無きか」（『京都帝国大学寄宿舍誌』第3号、1912年、62-63頁）という文章の中で次のように述べている。

吾々は当時の新入寮生として今も耳に残って居るが、新学期の初め所謂南北寮事件の報告会なるものが食堂に於て開かれて直接事に当つた寮生から委細の顛末が発表されたのである、而して全寮生は茲に始めて自分の船が自分たちの上陸中に暗礁だか敷設水雷だかに乗り上げようとした事もあると云ふ事を知つて大に驚くも同時あゝ危なかつたが先づよかつたと思つたのであつて、満堂を覆す様に起つた拍手の音は有志寮生の労に報ある処の戦勝の音楽の如きものに当つたのだ  
詳細は不明であるが、外山が一高式の寄宿舍に

- 強く共感していたことは確かであろう。
- (16) 「自彊会」『以文会誌』第2号、京都帝国大学以文会、1910年、128 - 129頁。
- (17) 同書、128頁。
- (18) 『京都大学百年史』資料編2、2000年、329頁
- (19) 「寄宿舎沿革概略」『京都帝国大学寄宿舎誌』第1号、1910年2月、85頁。
- (20) 同書、86頁。
- (21) 木下広次「寄宿舎に就て」『京都帝国大学寄宿舎誌』第1号、1910年、1頁。
- (22) 北田正平「暗鬼乎」『吉田之秋』（舎内回覧雑誌）、1906年10月、42頁。
- (23) 前掲「寄宿舎沿革概略」、91頁。
- (24) 石川一「舎誌に対する予が希望」『京都帝国大学寄宿舎誌』第1号、1910年、5頁。
- (25) 「自彊会」『以文会誌』第2号、京都帝国大学以文会、1910年、128頁。
- (26) 同書、128頁。
- (27) 同書、129頁。
- (28) 京都帝国大学自彊会同人編『学界之先蹤青年修学指針』博文館、1906年、682頁。
- (29) 「理工科大学同婦会」『以文会誌』第1号、1909年、106頁。
- (30) 「京都医科大学及芝蘭会」『以文会誌』第1号、1909年、78頁。
- (31) 前掲『京都大学百年史』資料編2、204 - 205頁。
- (32) 前掲「自彊会」、126頁。
- (33) 同書、129頁。
- (34) 同書、130頁。
- (35) 1907年5月に奈良県の畝傍中学校より大学に野球部奨励のために大学生派遣の要請があり、自彊会員2名が講演に赴いた。自彊会としての講演活動はこれが最後であったようである。
- (36) 『以文会誌』第1号、1909年、1頁。
- (37) 同書、1頁。
- (38) 前掲『自彊会々報』1909年7月、6頁。
- (39) 同書、6頁。
- (40) 同書、7頁。
- (41) 大山壽「切磋団体問答」『京都帝国大学寄宿舎誌』第1号、1910年、10 - 13頁。
- (42) 小野寺精一郎「第八高等学校より」『京都帝国大学寄宿舎誌』第3号、1912年2月、87頁。
- (43) 「寄宿舎新築模様替理由」『明治四十五年以降寄宿舎一件』（簿冊）。
- (44) 花田大五郎より千秋二郎および会員宛書簡、1912年5月18日付。
- (45) 花田のほかにも、京大に赴任した会員としては、落合太郎（文科大学教授に就任。一高出身、1913年文科卒業。のちに三高最後の校長もつとめた）がいるが、自彊会員としての経験と京大赴任後の教育活動との関係については今のところ不明である。
- (46) 根木精一「解散式及其前後」『京都帝国大学寄宿舎誌』第3号、1912年、13 - 14頁。
- (47) 「運動会」『以文会誌』第1号、1909年、15頁。
- (48) 前掲「寄宿舎沿革概略」、88 - 89頁。
- (49) 放言子「舎生々活の側面観」『京都帝国大学寄宿舎誌』第1号、1910年、45頁。
- (50) 前掲「寄宿舎沿革概略」、89頁。
- (51) 前掲『京都大学百年史』資料編2、930頁。
- (52) 『旧制高校史の研究 一高自治の成立と展開』信山社、2001年。
- (53) また現在の大学においても共通する点があるかもしれない。教育界全体で、被教育者が教育サービスの一方的受け手ではなく「みずから学ぶ」ことがもとめられている。こうした中で大学教育改善のための有効策が成立するためには、大学教育の改善を自発的に求めていくような学生集団が存在することが、あるいは、存在しなければ育てていくことが、重要な条件であるといえるのではないだろうか。この視点は今後の大学改革を考える上で欠かせないのではないかとと思われる。